チュウゴクナシキジラミ

○被害と発生生態

本種は、中国及び台湾に分布し、国内では平成23年に佐賀県、平成24年に山口県で発生が確認されている。台湾ではPDTW(ナシを枯死に至らしめる病害 pear decline in Taiwan)の病原ファイトプラズマを媒介することが報告されているが、日本では本病害は確認されていない。

幼虫が主に葉裏の主脈付近で吸汁し、排泄物(甘露)にすす病が発生するほか、葉の黄化と早期落葉を引き起こす。早春から晩秋まで発生を繰り返し、主としてナシの樹皮下で成虫態で越冬する。本種は季節型(夏型・冬型)が知られ、成虫の全長(頭頂から前翅端まで)は夏型が2.2~2.8mm、冬型が2.8~3.5mmである。また、体色は夏型が青緑色から黄色まで変異に富み、冬型は黒褐色で腹部に黄褐色の縦条がある。幼虫の体色は夏型が淡緑色から黄色で、冬型は黒褐色である。葉縁や植物体表面のくぼみに産卵し、卵形は紡錘形で産下直後は白色のちに黄色となる。

○防除方法

(ア)耕種的防除

・剪定枝や落葉は園外に持ち出し適切に処分する。

(イ)薬剤防除

・発生園では幼虫発生開始時の4月下旬~5月上旬 と成虫幼虫の急増前の6月下旬~7月上旬に防除 する。



図1 葉柄基部に発生したろう状物

(ウ)防除上の注意

- ・果そう部や葉に付着する甘露や、幼虫が尾部から排出する白色のろう状物を目安として、早期発見に努める。
- ・黄色に誘引されるので、黄色粘着板を設置して早期発見に努める。

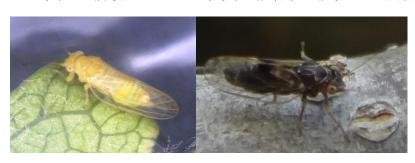


図2 成虫(左:夏型、右:冬型)



図3 卵(左:葉縁、右:短果枝しわ部)



図4 5齢幼虫



図5 葉裏に寄生した幼虫とろう状物



図6 葉裏のすす症状